

# 大正自由主義教育における人格的主体の形成 —自己超越の契機との関連において— (要旨)

宇野 美恵子

## [1] 課 題

近代日本の教育思想史における重要な課題は、いかにして普遍的価値に開かれた人格的主体の形成を論理化し、これを日本思想に内在化させるかにある。

元来人格という概念は、一般には人間の特性を統一的にいいあわす場合に用いられる。しかし哲学的、倫理的には、人間をして人間たらしめる本質的本性及び道徳的価値を意味し、具体的には、他の個我から識別しうる独自の個我の身体性、感性、知性、宗教性の全体のあり方とその統一を意味している。本稿ではこれらをふまえながら、主として人格を究極的価値との関係における個我として把握したい。したがって人格的主体という場合には、究極的には創造的超越者に対して応答するとともに、その独創的な中心をもって倫理的に実践する個我としての主体を最も明確な類型として把握する。そのことは、個我として究極的価値に従うこととの関係において自らを相対化し、抑制して、自己中心から解放され、地上の権威からも解放されると同時に、社会の一員として隣人との共存を実現する自由な人格を理想とすることである。さらに人格的主体の概念は「自由な認識主体の意味でも、倫理的な責任主体の意味でも、また秩序形成の主体の意味でも」「否定的な同質化（異端の排除）作用」（丸山真男『日本の思想』）に抗して個我や人格を成長発達させることを理想とする、より具体的な意味をも含んでいる。

ところで歴史的に見るとき、近代日本の教育においてまず求められた目標

---

本論文は、著者が国際基督教大学に提出した教育学博士学位論文の概要である。

は、福沢諭吉のいう「権力の偏重」する人間関係や社会関係からの解放であり、人間の自由を無視する権威主義的な社会規範との対決とその克服であった。したがって、個人の個性を尊重し、自己実現を奨励し、自由や自主の精神を鼓舞することはまず必要な課題であった。具体的にいうと、明治期にあっては、啓蒙主義思想家や自由民権思想家が唱導した自由、自助、自治の理念、日本人および外国人宣教師によるキリスト教学校の人格主義教育、植村正久の影響下にあった巖本善治を中心とする明治女学校を基盤とした『文学界』の浪漫主義運動、平民主義時代の徳富蘇峰の標榜したキリスト教的道徳、政治的自由、経済的平等の理念などは、近代的個人の尊厳を追求したものとして高く評価できる。

しかし個人の尊厳、自由主義の精神を、家族主義的、集団主義的伝統の根強い日本の精神的土壌に土着させることはきわめて困難な課題であった。なぜなら自由主義は一般民衆から放縦や勝手と同一視され、不信の眼で見られることが多かったからである。民衆が自由の理念に目覚めることをおそれる為政者や指導者は一般民衆のこのような不信感をも利用して、自由民権運動や自由主義思想に干渉や圧迫をくわえようとした。また当時の自由思想の側にも慣習、共同体規制の解体を背景に、ともすれば無根拠、無限定の自己、実感主義による自己絶対化を主張する傾向があったのも事実であった。

したがって自由主義を展開するためには、自由には抑制の原理が結びついていることを明らかにすることが必要であった。そしてこの自由と抑制ないし自己規律の問題は、明六社の人々や一部の民権思想家によって提示された。たとえば西村茂樹の「交際上の自由」、福沢諭吉の「分限」、中江兆民の「性法」はそのような規律の根拠を示すものである（武田清子『日本リベラリズムの稜線』）。これらの自由とその抑制の原理は、人間関係における人の道、天理としての自然法、人格的意味をもふくむ宇宙の法など伝統的な概念とながっているが、しかしなおそれらは伝統主義とは異なっている。彼らにあっては、自己把握の普遍的根拠、人間存在の究極的な拠点はそれぞれの「天」意識におかれており、「天賦人権」論が示すように、その「天」観は儒学の「天」

意識や「天人合一」思想を受け皿にして、西洋の十八世紀の自然権の概念を近代西洋の自然法思想との緊張関係において理解し、またそこに含まれた理性的人間観を受容しているからである。

この時代にあって、自由と抑制の関係を思想的に最も明確に把握したものはキリスト者である。ことに新島襄、植村正久、内村鑑三のような人々の場合、彼らによってルター、カルヴァン以来の自由と責任に関するプロテスタントの精神が継承され、自己中心性における自己が完全に否定され、神によって立てられる新しい自己、真の自己への転換という内面的自立の理念が導入された。この宗教的帰依によって真に自己に目覚めた個我は、地上における自己のありのままの姿を対象化し、さらにその超越的な価値によって、この世の権威、国家や諸集団の規制を相対化しあるいは対象化する視点を獲得することができる。このように、自己超越、そしてそれによる自己否定によって真我即ち新しい自己の認識をえることは、究極的には超越者の側からの恩寵において完成するものであり、宗教的帰依の問題となるであろう。

このような宗教的帰依による自己認識の発想に近いものとして、日本には法然や親鸞の唱えた浄土宗・浄土真宗があり、これらは罪深い人間の救済を念仏往生にもとめ、この世を越えた阿弥陀如来を信仰の対象とする「他力道」実践の道を開いた。とくに親鸞（1173－1262）においては、彼の「悪人正機」の洞察はその救済意識を明確にし、人間の「虚仮不実」を認識させ、伝習の根源的基盤である両親や国家も一度否定するようなラデカルな実践力を潜在させている。したがって宗教的帰依にまで至った自己超越、そしてそれによる自己否定の発想は宗教改革の精神の中にだけでなく、ある程度日本の伝統思想の中にも発見することが可能である。

それにもかかわらず、このような発想はなお日本文化の中では主流とはいえない。なぜなら日本の宗教的古層には、小地域の水田耕作に制約された家、ムラにおける上下の血縁的關係にもとづく祖先崇拜の伝統が根強く、それはまたより拡大された社会結合においてもその底辺を形成しており、いわゆる疑似親子関係も含めて、両親や共同体を無条件に肯定する価値観が一般的で

あったからである。周知のように、明治の為政者もこの伝統的規範意識を近代国家形成の土台に組み入れ、とくに日清・日露の両戦争後あらためて家族主義国家観を強調した。社会有機体説と結合したこの国家観においては、当然普遍主義、世界主義の傾向は後退し、排他的ナショナリズムや忠君愛国を強調する国民道徳が正面におしだされた。明治43年の修身教科書の改定はそのあらわれであった。

したがって親鸞に見いだされるような自己超越の発想が、近代日本においてどのように思想形成の契機となりえたのかは慎重に検討されなければならない。さらに明治初期に見られた「分限」，「性法」，「天理」などにおける自由と倫理的自己抑制の原理との緊張関係が偏狭なナショナリズムや忠君愛国の国民教育思想とどのようにかかわったのかは、歴史的に具体的に考察されなければならない課題である。

このような視点に立つとき、日本教育思想史において大正思想は最も興味深い対象である。

## 〔Ⅱ〕 大正期の教育思想の動向

この時期の日本においては、資本主義の発展によって農村の伝統的共同体が大きく動揺し、貧富の差がますます拡大していた。他方、外来思想の爆発的な導入と情報の一般化によって、新しい個我の意識や自我の主張、個人主義や自由主義の風潮が都市を中心に浸透しつつあり、農村にも波及しようとしていた。このような状況を背景に臨時教育会議（大正6－8年）は新しい時代の要請に対応して教育制度改革の具体策を打ち出したが、しかしその結語においては「醇風美俗」や「国体ノ本義ノ明徴」も謳われており、自由主義批判の潜在的力をも増大させつつあった。

それでもなお大正時代の教育は、大正デモクラシーを反映して教育実践の場で個性尊重、自由、自立、自律などの普遍的原理を確立することに重点がおかれている。折りから明治後半期に導入されたペスタロッチ、フレーベル

の教育思想の研究が深められ、ジョン・デューイの進歩的教育、エレン・ケイやモンテッソーリの児童中心主義の教育理論などが広く知られるに至った。教育界にも、個性尊重、自学自習、労作教育などの意義が重視され、科学的理論に基づく新教育のアプローチが実践される機運が広まっていた。しかしこのような自由主義教育を広く日本の土壌に取り入れる際には、前項で強調したように自由の理解を深め、自由を放縦や勝手と区別するなんらかの原理による自己超越の契機との結合が必要であった。

このような場合、大正の思想家においても、明治の思想家におけるように、自己超越の契機は儒教や仏教のなかに可能性として存在する普遍主義的要素に着目して発想されることが多かった。

上述のように、大正期の思想の動向は一般的に合理主義を尊重する方向に向っているが、さらにそのためにも新しい時代における普遍的倫理が一層強く求められるという状況があった。そしてその際に実践的主体性を回復するために仏教における禅の伝統もまた着目された。道元（1200－1253）の「仏向上」の思想や「修証一如」の実践論、「修善のものは昇り、造悪のものは墜つ」という仏教倫理もこのような思想的課題に応じる発想をもっている。さらに陽明学も「心即理」や「良知」に基づく「知行合一」思想によって、理想主義的实践の可能性を用意する側面をもっていた。これらに近代思想、近代精神が浸透したとき、伝統的な用語や概念にも変化が見られ個人の尊厳や内面性への自覚を深め、またそのことによって新しい社会的価値が自覚されることも多かったのである。しかし従来指摘されてきたように、これらの伝統もこの時代までにその革新性を日本的風土に埋没させてきた観がある。例えば大正期における「人格主義」「教養主義」の一面を代表するとされる阿部次郎（1883－1959）の場合、『三太郎の日記』におけるように認識主体としての「我」の強い肯定を示し、さらにこの主体をセオドール・リップスの唱えた「人格主義」の倫理的秩序のうちに位置づけて倫理的課題にも応えようとした。そしてその人格主義の概念は自己の内省と深く結びつき、自己の深層に根拠をもつ理想主義として展開した。ただし阿部の場合はその

理想主義は美的・倫理的思想であり，文化的日本主義の方向に向かう。そこでは個人の尊厳といっても，それは西洋近代の19世紀にあらわれた「国家からの自由」という近代的人権の発想とは結びつきにくかった。

したがって大正期のこのような一般状況にあって，日本の精神的土壌においてどのように新しい普遍的価値が承認され，自由の理解が深まっていったのかは，さまざまな角度から具体的に究明され考察されねばならない問題である。

以上のような見地から，本論文では，大正自由主義教育にかかわった次のような人物，中村春二，野口援太郎，守屋東，及び長野県の教育者，手塚縫蔵，赤羽王郎，小原福治の場合を取り上げて考察したい。

### 〔Ⅲ〕 大正自由主義教育における人格的主体の形成

#### (1) 伝統的規範意識から近代的責任主体形成への道程

##### (A) 中村春二の自由教育の実験

第一章は，中等教育機関（成蹊学園）すなわち当時の実務学校レベルで仏教的色彩の濃い人格主義的自由教育を展開した中村春二（1877－1924）の場合である。中村は地方の伝統的知識人の家系の出身者であり，彼自身も国学の素養があった。しかし同時に明治10年生まれの中村は明治維新前に人間形成を終えていた人々とは異なり，「学制」（明治4年）や学校令（明治19年）のもとで近代学校教育を受け，東京における第二世代として番町小学校，第一高等学校，東京帝国大学文科大学のコースにより洋学系の学問体系にも触れた。彼が幼少時に漢学の塾に通ったり，「四書五経」を読んだりしたのかどうかは不明である。しかし説文学者として高名な曾祖父山梨稲川，国学者で歌人でも知られる父中村秋香を敬愛していた中村は，伝統的な「天」意識や「自然」観において彼らと深く共鳴するものをもっていたようである。中村の思想には「自然」を敬愛の対象とする発想がはっきり見られるが，そ

の「自然」とは自己を超え自己を包む「自然」であり、しかも自己の深層や「良心」とも通いあうものであった。

他方、中村は明治啓蒙主義による「文明開化」の価値意識をも深く吸収した世代であった。個我の意識や自立の自覚を深めるとともに、自然を対象化する認識方法とその自己意識をもちつつあった。さらに親友岩崎小弥太と今村繁三を通してイギリスのパブリック・スクールの自由主義的紳士教育の理念やフェビアン社会主義の社会改良思想からも実践への志向と刺激を受けていた。

このような自然観や人間観の拡大や葛藤の意識のなかで、中村は近代日本人に共通する人生の根拠を模索する悪戦苦闘におちいり、伝統的規範から近代的責任主体への自己超越の契機を追求し、より深い個我意識と自己集中に向っている。この過程で中村は永年の家の宗教である浄土真宗から曹洞宗（禅）に改宗したとされるが、より重要なことは改宗ということよりそれが中村の新しい倫理的実践的主体の形成に対してもった意味にある。すなわち中村は自力曹洞宗の座禅共同体として発達してきた僧堂教育の教育実践に学び、一方における座禅（凝念法）、他方における労作教育、寒中水泳、夏の合宿共同生活を実施したが、それらは曹洞宗における根源的真理に基づく自己認識のための訓練であり、卑俗な意味での精神主義と一線を画した。さらに人格的個性についての思想においても、中村は禅の『十牛図』に示される人間精神の現象と構造にその発想を得ている。そこでは人間の個性は世俗的現実の中にあるにも拘わらず、個性はこの世の中に完全に解消されることなく、根源的真理に向かって自我の主体的意味を更新、向上させることができることが示されている。中村はとくにその第十図の「入廓垂手」の段階において、個性が混雑労苦の現実世界の内部にありながら「利他」の実践的主体となりうる精神の段階が示されていると解釈した。近代精神を支えたキリスト教思想にふれた中村は、このように仏教思想のなかに個我すなわち人格の独自性を見いだしたのであり、彼の個性尊重の思想はこのような発想に基づくものであった。

このような人間観に基づいて彼の家庭を開放して私塾としたものが成蹊園であり、これが後、成蹊実務学校、中学校、小学校などに発展した。人間の本性の実現の可能性と倫理性を仏教思想を契機に発想した中村は、その立場から自由と規律の関係、自己と社会の関係を設定し、また官僚的・制度的修身科や国定教科書に反対した。大正自由主義教育の先駆的形態として、伝統思想のなかに個我の尊重や倫理的自己抑制の原理を追求した一例であった。

## (B) 野口援太郎の自由教育の哲学

第二章は姫路師範学校の改革や池袋「児童の村」小学校の自由教育において、児童生徒の自発的・自立的実践を重視した野口援太郎（1868－1941）の場合である。彼は浄土真宗の盛んな福岡県の寺子屋教師をつとめた庄屋の家系の出身で、その思想の傾向は合理主義の尊重にある。

明治元年生まれの野口は、北村透谷や徳富蘆花と同年であり、その三年後の国木田独歩、高山樗牛、西田幾太郎という人々とも同世代であった。彼らは近代学校体系による小学校教育を経験した世代であるとともに、それと平行して「四書五経」の素読を体験し、少なくとも、多くの漢籍にふれて育っている。その境界に位置しながら、そのどちらも確固たる価値体系を形成しえないという世代である。しかしこのような時代にあって、野口は伝統的規範が薄れ「個人析出」が現れ始めた明治後期に、師範学校生徒の寄宿舎生活に一定の自治制を採用し、教科の学習にも生徒の自発的・自律的なプログラムを案出するなど、学校生活に穏当で合理的な改革をほどこそうとした。それは合理的ではあっても、民族の伝統や伝習にかなった仕方で彼らの自律心を育てようとする試みであった。また大正期には、帝国教育会を背景に教育擁護同盟や「教育の世紀」社に関係し、大正期の教育課題であった「児童中心主義」の思想を広め、成城小学校とならんで自由教育の実験校と称された池袋児童の村小学校の校長となった。

野口もいわゆる「煩悶」を経験したが、同時代の人々の悲哀や無残を感じ

させる悪戦苦闘には至らず、一種の安心立命観を示している。それは彼が内面の確信を保ち得たからであり、その確信は神・儒・仏の庶民倫理において養われていた「天」，「天命」，「如来」などの意識によって規定された価値観と大正期の民本主義的価値観を統一していたからである。基本的には儒学の「天理」観を契機として、野口は前期にはジョン・マッケンジーの新カント派の実在論から理性主義的人間観を学習し、後期にはマリア・モンテッソーリの心理学、生理学を基礎とする発達理論を吸収した。とくに後者から生徒のための教具や環境の重要性、発達段階に応じた学習の必要などを学び力説した。前章の中村春二が内面志向型パーソナリティであって、自由の理想を内面に求め、自主独立を志向した理念型であったとすれば、野口は庶民化・民衆化する学校教育の課題に応じて平等の理想をより強く追及し、すべての子供の根源的生命力と理性の発達を信頼する、民主を志向する理念型に属した。

以上のように、野口の師範学校時代の「自由教育」の思想と「児童の村」小学校時代の「新教育」思想とは、野口のなかではその異質性を溶解する「天理」の実在論的理解により連続させられている。彼の天理の理解は、徳川中期以降の非形而上学化された、人間や社会を貫徹する道德性、良知の理解を媒介として、自然法思想における普遍的理性や自然権の理解へとつないでいる。

このような儒学（特に孟子－陽明学の系統）における「天理」観に基づく野口の認識論は、経験合理主義による折衷的傾向を特徴とするものであった。例えば野口は、二宮尊徳の報徳思想を評価したが、これを内村鑑三の尊徳観と比較してみても、野口はそこに明確な自己超越の契機を見いだしたというわけではない。野口が「敬天」より「知天」を強調した所以であった。そしてこの合理主義は陽明学の「知行合一」を、物に即して理を見いだすという実践的立場を尊重する思想として理解したものであった。明治・大正期には非常に開明的であった野口が、昭和の戦時下に国家の「生成発展」を前面におしだす「八紘一字」思想に「癒着」させられていったのは、このように社

会の趨勢や現象，人心の動向のうちに「理」を見いだすという野口の思考における折衷的傾向と無関係ではなかったであろう。

### (C) 守屋 東の社会教育への関心と活動

第三章では社会教育，女子教育の分野で活動した守屋東（1884－1975）の場合の倫理的実践的主体の形成を考察した。守屋は会頭矢島楫子らとともに，世界（米国）基督教婦人矯風会の社会的福音の思想や教育運動の理念を受容して，主として禁酒運動による社会教育に従事した婦人である。

矢島楫子（1837－1925）の場合は，小崎弘道（1856－1938）同様，幕末儒学の「実学」派の思想的影響を受けた。その代表的思想家横井小楠においては，「天」の概念は万物の主宰者としての天，あるいは人格的な天帝として理解されており，矢島もこのような思想的土壌において人間形成をとげたが，後，新栄女学校のミセス・ツルーの感化のもとに，47才の時宣教師タムソン博士より洗礼を受けた。女子学院と矯風会によって，幅広い教育活動，社会活動を実践した矢島の課題は，人格的關係による社会秩序の実現であり，具体的には，矯風会の道徳的政治的理念を日本の土壌に根づかせることである。前章の野口援太郎の場合でも，彼のデモクラシー観はあるべき皇室のイメージと矛盾しないものであったが，矢島においても，市民の自由と平等が実現される政治社会の理想は，皇室の道義性に対する敬愛とは矛盾しないものであった。それが矛盾とならなかったのは，彼女の宇宙像が人間と社会を連続する儒学の「天」意識と重なっており，そこではすべてが道徳の問題へと収斂していたからであろう。しかしその場合でも，矢島や天皇や皇后のために「真の神」への信仰を祈禱し，日本の精神的土壌の内側から土を耕して，キリスト教化しようとする明確な意識をもっていた。

他方，守屋東は，この矢島から彼女の社会教育の精神と歴史意識を受けついでいる。武士出身の軍医の長女として，両親から独立心や社会的責任意識をそだてられた守屋は，間接的には儒学の倫理意識や教育主義の

傾向を示している。しかし明治17年生まれの守屋は、田山花袋、高村光太郎、武者小路実篤たちと同時代人であり、中村春二と同じ番町小学校に学び、府立第一高等女学校を卒業後、仏英和女学校でフランス語を、東京音楽学校別科でヴァイオリンを稽古し、他方、ユニヴァーサリスト教会経営の宇宙女塾や片山潜の開催する日曜学校に出席し、17才の時番町教会で綱島佳吉牧師から洗礼を受けた。すでに新しい時代の自由や自立の自己意識を育み、近代的な個人の尊厳という価値意識をも浸透させていた世代であり、当然儒学を直接体験した矢島とは異なる課題を見いだしている。

守屋の意識を支えているものは、一方においては士道的廉恥心であり他方においては経済的及び精神的自立への強い要求であり、この意味での人間性の肯定である。この人間性とくに女性のそれを束縛する「家」からの解放と新しいホームの建設が守屋の一貫した実践的課題であり、それは同時代の田山花袋や高村光太郎が模索していた思想的課題とも重なっていた。しかも当時日本社会では「家」や「親孝行」の名のもとに公娼制度が存在しており、日本の婦人矯風会運動は廃娼運動を中心に展開されることになったのは周知のことである。当時の新しい仏教小説やキリスト教的「家庭小説」に家庭の理想を模索していた守屋は18才の時、決断して矯風会の契約書に署名し、以後30年以上この会の活動に従事した。

守屋がかかわった禁酒、時事問題、動物愛護運動、社会事業、平和運動などは総て新しいホームの理想とかかわっており、とくに少年や青年に temperance の原理を広く教育とマス・メディアによって伝えようとするものであった。それは大正期になって出現した社会教育の実践である。さらに矯風会の一般活動に参加することによって、守屋は人権擁護の理念、一夫一婦の人格的關係をもつ家庭観、社会的弱者の社会的救済などの理念を日本の土壤に根づかせるための社会実践において実践的キー・パースンの一人となった。大正期の婦人運動における婦人の自立と共同という課題に対して、政治・社会問題にかかわる論理は弱い、宗教的信念に基づく歴史的形成の使命感をもって応えている。その使命感は一種の天職感である。

すでに婦人参政権問題が婦人運動の主要な任務となっていた関東大震災以降の政治思潮のなかで、守屋は政治運動に直接かかわるとともに、社会福祉すなわち貧児教育から肢体不自由児教育への道を選んでいる。守屋の天職観は、矢島同様に儒学の「天」意識、誠をもってなされるべき「究理」の自己意識や「仁」「義」の社会意識を連動させながらも、キリスト教の福音主義と終末観を内包させている。その思考は折衷的傾向を強く示すが、それにもかかわらずこの天職観によって、彼女は自己を大正期の社会に定位することができたのである。

## (2) 大正期の長野県における自由教育と人格主義

### — 手塚縫蔵，赤羽王郎，小原福治の場合 —

第四章では長野県における教育者群像を通じて、大正期の人格主義的自由教育の可能性と限界性を究明しようと試みてみた。長野では徳川時代を通じて、寺子屋の発達が著しく、儒学、心学、仏教による民衆教育、民衆倫理が発展した。とくに人格尊重の教育や人格的接触を重視する民衆の教育伝統があり、厳しい環境における経済活動に基づく独立心が高く評価されてきた。他方その地理的条件によって、外来文化の摂取においても極めて積極的であったことは周知のことである。こうした求心性と遠心性の強力なあい反する指向としかも同時にある種の自立性を示しているために、長野は日本全体のミニチュアたる意味をもち、試験管における観察を可能にするような観を与える。とくに近代においてキリスト教が教育界に幅広い影響を与えた地方社会としても非常に興味深い。本章では内村鑑三、植村正久のような明治のすぐれたキリスト者から直接指導を受け、高村徳太郎や矢内原忠雄などとも深い親交のあった手塚縫蔵（1879－1954）と小原福治（1883－1965）を、キリスト者の教育思想の展開の例として分析し、さらに赤羽王郎（本名一雄 1886－1981）を白樺派の人道主義、人類愛の思想に裏付けられた児童観、教育観の展開の例として考察した。

手塚縫蔵、赤羽王郎、小原福治らは長野県の公立小学校の教師として、大正自由主義の潮流のなかにあって活躍し、教育界でそれぞれ大きな影響力を及ぼした人々である。

手塚縫蔵は明治12年、中村春二の二年後に、長野県の農家に生まれ、長野県師範学校生徒の時代に内村鑑三の『聖書之研究』を読み、つづいて高木信吉、井口喜源治、スタッカー宣教師夫妻、植村正久などの影響のもとに聖書を学んだ。他方、当時長野に導入されて大きな流行となっていた『明星』、『文学界』、『国民之友』、『日本人』によっても強い感銘を受けた。このような読書や研究を通じて、手塚は内村鑑三の唱えた「二つの J」、Jesus と Japan への忠誠を自己の内面に統一しようとする思想にいたり、なお折衷的傾向は免れないものの、内面的自立の原理を無教会派のキリスト教に見いだすにいたった。

さらに東京神学社に学び、校長植村正久の指導を受けたが、彼の牧師への薦めを辞退して小学校教師として歩むことを決断した。この後、手塚が会運営の中核を担った「東西南北会」、また松本幼稚園において発足させた聖書研究会から、大正期の信州教育、自由教育にかかわった多くの人材が生まれている。後に牧師となった小原福治、信州白樺派リーダーの一人赤羽王郎、あるいは川井訓導事件で国家主義的官僚統制の犠牲者となった川井清一郎といった人々はみなこの聖書研究会の出席者であった。

手塚は高等小学校の校長となり、東筑摩教育会長ともなったが、同時に修身科担当の教師としてまた在野の伝道者として伝統的な「道」、「敬天愛人」、「則天去私」の用語を使用して、それらの意味する超越的な価値意識や感覚に支えられて、宗教的帰依の問題について語っている。そしてこの絶対的拠り所に立つことによって、内村鑑三に告げられた「大いに黙して事をせよ」「天の力を受けて忍耐せよ」を実行し、「地の塩」の働きを続けたことは、矢内原忠雄が後に彼に捧げた弔辞のなかにもよくあらわれている。とくに常に官僚的威圧的統制や軍国主義による圧力に抵抗し、赤羽たちの運動を底い理解を示したところに、手塚の自由で闊達な人格的個性が発揮された。

手塚が強調する人格主義教育とは、一言でいえば、「我愛せられる故に愛するなり」という宗教的帰依によって立たされた主体性と、「存在は教育なり」という社会的責任の自覚である。ただし、人間の社会のダイナミズムやメカニズムに対する認識はいまだ未成熟であった。

他方、赤羽王郎は明治19年、初期の長野師範学校を卒業し校長なども勤めた教育者の家庭に生まれ、守屋東の2才年下であった。赤羽の場合は父の師範主義、国家主義への反発ないし批判意識が強くみられ、反面、自分の人生観を形成することもできず、いわば未定形な自己の自己超越の契機を見いだそうとする苦闘は、守屋に比べてはるかに激しいものであった。赤羽においては「天」や「自然」への畏敬という伝統思想はすでに自明の前提ではなく、自己自身でその意味を発見すべき対象であった。

中学時代赤羽は主として高山樗牛の『美術及び美術史』によって美の価値と内面的自立の世界に関心をもつに至り、その後明治浪漫主義者のヒューマニズム文学の影響やトルストイ、クロポトキンらによる社会改良思想のインパクトを受けた。しかし自殺を繰り返したこともある赤羽にとって、決定的な意味をもったものは、武者小路実篤の思想であり、柳宗悦の人格的感化である。赤羽の思想は一方では強い自己の肯定、他方では武者小路の唱える人類的人道主義、とくに偉大な魂やその作品が示す人類的价值意識との緊張関係によって、自己を形成し「自己を生かしきる」ことであった。このような赤羽の思想は当時の若い教師たちの感動に支持され、信州白樺派と呼ばれる教師群の一連の教育実践をひきだしたのである。赤羽はさらに柳を通してウィリアム・ブレイクのキリスト教神秘主義思想にも触れ、彼の永遠の「<sup>グイヨン イマジネーション</sup>幻像と想像」の観念によって未来意識をもち、とくに子供達にその理想を託そうとした。赤羽たちのユートピア的理想主義を目指す芸術的教育運動は、「信州白樺教育」運動と呼ばれ、その後『地上』（大正8-10年）という同人雑誌によっても広められ、信州白樺派教員たちは最盛期には同調者も含めてガリ版による多くの小冊子を県内の全学校、各クラスに流行させ、師範学校における児童中心主義による教育実践と合流させた。この運動は、本質的には同世代の教師

の自己形成の運動でもあった。さらに赤羽が中心的役割をはたしたものに、白樺派泰西名画展覧会の各学校巡業の案内や子供音楽会、読書運動などもあった。

しかし赤羽のこのような運動は芸術的、ユートピア的性格に偏り、また一種の規範主義、選良意識をも含み、子供のなかにはなまのかたちでこれらによって親や農民を批判する傾向が現れた。父母や農民はそれが彼らと教師たちとの信頼関係を裏切るものと考え、また伝習や習俗を無視するものと見て、白樺派教師に対する不信を示すものがふえた。赤羽には農民の社会史や精神史に対して関心や敬意をもつ余裕や努力は見いだせなかった。県当局者はこのような状況を利用して、「戸倉事件」として知られるように、赤羽を中心とした戸倉小学校の教師たちの運動を弾圧によって実質的に葬りさった。

しかし赤羽がその後県境を越え国境を脱出してどの場所に赴いても、子供達からは信頼を得ていることが示すように、赤羽は彼の人類主義的人道主義の感性を貫き、伝統的な「上下の道徳」に代わる美意識における「横の道徳」を真実に守り抜いたといえるであろう。

すでに述べたように、この当時長野県師範学校附属小学校においては、杉崎瑠、淀川茂重らを中心に、デューイやモンテッソーリの提唱する児童中心主義の教育論や科学的方法論が導入されており、彼らは「研究学級」において実験的教育を試み始めていた。この時期の附属小学校に在職し、白樺派教師たちとも親しい交流があったのが小原福治である。小原はそれまでに、ミューアヘッド、グリーンなどの人格主義的倫理学を学んでいたが、それらにあきたらずにこの頃手塚の主宰する松本の聖書研究会に出席していた。明治16年生まれで、赤羽より3才年長であったが、小原は島内小学校、松本開智学校高等科を卒業した。卒業の年、染色業の父を亡くしている。これ以後、就職と苦学の厳しい環境のなかで思想形成をとげた小原の場合には、同じ「煩悶」の世代ではあっても、赤羽の美的倫理主義にも手塚の超越的宗教主義にも偏らずに、これらを理解し相対化するリアルな認識を養っていった。

小原の回想によれば、小学校時代の教育は「英国輸入のギコチない翻訳式

の生硬」と「寺子屋式の古風な残骸」を併存させたものであった。後、検定により小学校訓導になってからも、新カント派の人格主義や自我実現説の倫理学と井上哲次郎の日本倫理思想を同時に研究した。しかし英語を得意とし原書による読書の経験を積んでいた小原にとって、井上の倫理学は飽き足らず、同時に倫理的主体の道德判断には人間の感情や深層が深くかかわるものであることを洞察して、「人生倫理学者になるべからず」という警告を内面に感じたという。このような経過をへて、小原は付属小学校訓導時代、児童中心主義の教育理論や自由主義的個性教育を経験すると同時に、植村正久より洗礼を受けるにいたった。

思想的には植村正久と高倉徳太郎の影響の比較的強い小原の場合には、義と愛という、究極的なものとの対峙における価値が明確であり、人間の尊厳に対する意識も罪の自覚も手塚や赤羽よりはるかに強いものとなっている。彼は常に「砕けし心」を強調しながら、社会的正義の実現にも積極的であった。川井訓導事件（大正13年）を中心に長野県で一連の「自由教育」の弾圧が起こった際には、小原は『信濃教育』誌上で「過去一年を想ふ」と題する強い調子の抗議文を発表し、日・独・伊の三国同盟の締結（昭和15年）に対しても言論をもってこれを批判し、ついに昭和16年3月、校長を退職して、以後は牧師として立ちながら積極的に教育講演をつづけている。このような小原の思想には「敬天愛人」の伝統的観念とキリスト教の隣人愛の理念とが結合され、内面的自由と私的活動の自由とが近代的、計画的に調整されている強い主体性を見いだすことができる。

小原は人間観においては、ゲーテの唯美的一辺倒の危険性にも、カントの自律的人格の抽象性にも誤解の危険性があると述べ、ルターの「汝為すべき筈である。けれども汝は為し得ない」に人間性の真相があることを強調している。長野県における儒学的伝統における規範主義的人格主義の傾向は、小原にいたって人格全体、全生活における自己、そして超越者から見られる人間性の自己認識に立つ新しい人間観、人格観への展開していった。

## [Ⅳ] 結 語

以上本稿で扱った人々はすべて、外来文化に内在する人類的価値や近代精神を受容した際、その要素を自己自身に内在化させ自己の思想を形成するにあたって、なんらかの形でその契機を伝統の中に再発掘している。またそれによって新しい知識、新しい倫理を見いだして、社会関係の秩序の形成に参加した。

もとより、歴史的に形成された物神崇拜的価値志向や段層的秩序観の根強い精神的土壌のなかで、個人としての尊厳という理念を確立し、これを普遍的価値と結びつけていこうとする思想を自ら形成し、さらにこれを新しい社会関係や国家統合の課題とも結びつけて考えるということは極めて困難なことである。これらの教育者たちも、その思想には曖昧さや限界が見られるのはいうまでもなく、まして大正期という時代がもつ限界や状況の中では、天皇制家族主義国家観との関係においては明確さを欠いている。しかし小原福治の例にはっきりと見られるように、彼の精神のなかに内面化された自己超越の契機は、国家や共同体の存在意義を認め、愛国、愛郷を追求しつつ、なお普遍的価値意識によってこれを相対化、対象化し、彼らの社会生活における自由と民主の関係を確立しうる可能性の萌芽を示した。当然そこにおける自由は自己規律との緊張関係における自由であり、民主主義は人格的主体の形成を前提（そして課題）として理解されている。

日本宗教の精神的土壌において、超越的、普遍主義的拠り所にたち、人類的な人格把握を内在化させ、個としての人格的主体を確立すること、そして自立した主体として社会関係－社会秩序－の創造に向かうことは、我々自身の教育思想形成の中心的なテーマである。この課題に対して、本稿で扱った教育者たちがそれぞれの立場から試みた種々の可能性の追求は、いろいろの意味で不十分さを含みながらも、我々の思想を深める際の貴重な道標のひとつを示すものということができよう。

**A STUDY ON THE DEVELOPMENT  
OF THE CONCEPT OF INDIVIDUAL SELF  
IN LIBERAL EDUCATION  
DURING THE TAISHÔ PERIOD**  
— With Reference to Notions of Self-Transcendence —  
(English Résumé)

Mieko Uno

**I Preface**

One of the most important subjects in modern Japanese educational thought is how to create a new social value system which is based on respect for the individual self. By using the term 'individual self', I mean the methodological concept on human personality whose character is nurtured by the transcendental and universal values on the one hand, and at the same time, has roots in the traditional culture. The purpose of this study is to examine some cases of educators in liberal education during the Taishô period whose thought laid stress on this subject. In pursuing this, I would like to investigate the intellectual or spiritual situation among modern Japanese people as to the development of the concept of individual self.

Before going to the analyses of each case, I traced the main current of the educational thought from the beginning of the Meiji period to the Taishô period along this subject.

As known widely, after the promulgation of the Imperial Rescript on Education (1890), and particularly after Sino-Japanese War (1894-1895), the Family State ideology was reinforced in Japan. In this process, Imperial Ancestors were explained as the symbolic heads of the ancestors of the whole nation as one family, and the essential character of the Empire was emphasized based on this ideology. However, even under the control of this ideology, the streams of early Meiji thought, for example, those of Meiji

Enlightenment movement, the Freedom and People's Right movement or the Meiji Protestants Christians had already penetrated into Japanese society and began to take roots in Japanese cultural soil. During the Taishō Democracy (1912-1923), the current of the educational course, reflecting the trends of the times, showed somewhat the liberal tendency and put the emphasis on the universal principles generally.

With such a historical background and under diversified values in a complicated environment, the advocates of liberal education in the Taishō period tried to develop the ideas of liberalism and to combine them with the notion of self-transcendence of the principle of self-discipline.

## **II The Development of the Concept of Individual Self and Responsibility to Society**

### **(a) The Experiment of Liberal Education by Nakamura Haruji in Seikei Jitsumu Gakkō**

The first chapter concerns Nakamura Haruji (1877-1924), who developed liberal education as one of the pioneers respecting individuality in a private school called "Seikei Jitsumu Gakkō" in Tokyo.

Nakamura came from a family of local intellectuals and had a discipline of "kokugaku", traditional Japanese literature. We find in his thought the profound feeling of traditional respect of "Shizen", the Great Nature. On the other hand, Nakamura learned about the individual and social values from the Western culture through the Meiji Enlightenment philosophers, especially such as Fukuzawa Yukichi and Nakamura Masanao. Under the influence of his father Nakamura Akika, a scholar of Japanese thought and literature, who was also very eager in absorbing new knowledge from abroad, Nakamura received modern education in the most progressive schools, such as the junior high school attached to "Tokyo Koto Shiha Gakkō", "Dai Ichi Koto Gakkō" and "Tokyo Teikoku Daigaku".

Furthermore Nakamura had a strong impact from the traditional ideals of the public schools in England through his close friends, Iwasaki Koyata and Imamura Shigezô who were sons of newly-rising bourgeois and the graduates of one of the English public schools.

After he learned those ideas and ideals, such as, those of independent spirit, social justice and duty to one's neighbor, he searched for the individual self or true self in his inner self in belief in Zen Sect of Buddhism. He found the practice of self-discipline in Zen Buddhism and applied the educational tradition of the Buddhist temple to education in his private school.

Further Nakamura interpreted the belief in Zen mysticism creatively, which was expressed in *the Ten Oxherding Pictures* which had been a famous handbook written by Zen Buddhists in the twelfth century in China and read widely in Japan in the Edo period. He found the religious self-recognition and self-transcendence in the highest level of the pictures which symbolized the 'I-Thou' relationship. It is interesting to note that Dr. Ponsonby, the English translator of Nakamura's essay, commented on Nakamura's philosophy as follows: "It differs from that of the 'Modernist', who, while discarding the Person of Christ, yet, claims to teach as a Christian." Though Nakamura's philosophy had the original notion in Buddhism, it may be compared with Inazo Nitobe's educational belief upon the Quakers based on the message in the Bible, 'in the world, but not of the world.'

Nakamura opened his home as a private school and dormitory at first in order to teach poor boys, seeking to establish a new educational community. Through such an experiment, Nakamura, as a 'self' still in the transition, had been changing the traditional concept of home, community, and closed human relations of consanguineous and authoritarian society into a more humanitarian relationship of independent self.

**(b) The Educational Philosophy in Ikebukuro Children's Village School by Noguchi Entarô**

The second chapter is concerning Noguchi Entarô (1868-1941), who contributed to the innovation of education at the Himeji Normal School and also participated in the foundation of the Ikebukuro Children's Village School, one of the New Schools famous for liberal education in the Taishô period.

Noguchi came from the family of a village master and his father was a teacher of "terakoya", a private village school in the Edo period in Fukuoka Prefecture. The essential character of his philosophy was based upon "Tien-li" and "Tien-mei" which showed rationalism and ethic of Wang Yang-ming school of Confucianism which he was accustomed to while young.

When he was a dormitory inspector in "Tokyo Koto Shihan Gakkô", Noguchi took an interest and made a hard study of neo-Kentianism of John Mackenzie whose *A Manual of Ethics* (1893) was welcomed in Japan as idealistic ethics in the 20's and 30's of the Meiji period and later he translated it by himself. In the Taishô period, he became one of the earnest researchers and advocates in the New Education movement and learned psychological and scientific methods of education as well as idealistic ethics from Maria Montessori, John Dewey and others.

Noguchi relied on the development of intellectual and moral abilities in children and the vital power of children's life. His 'children centered' educational philosophy was based on his belief in "Tien" both outside and inside of the nature of human beings.

Besides, Noguchi participated in the political movement of teachers to protect educational activities from the militaristic course by the government and played the important role in the "Teikoku Kyoikukai" the teachers' vocational association. His contribution covered the research for co-education, the necessity of higher elementary school, teachers' union and the role in women teachers problem and international education.

Noguchi regarded ancestry worship as behind the times, and found the universal values or significance in Ninomiya Sontoku, a farmer sage. He interpreted Ninomiya Sontoku not only in the traditional ethical context but also in the modern experimental and utilitarian context. In his educational philosophy, the primary concern might be said in the respect for "Tien-li", a kind of rationalism including idealism. Ikebukuro Children's Village School was named on his philosophy which emphasized the equal human relations of mutual help based upon "Tien-li".

However, his concept of "Tien-li" had mixed the meaning of values and the laws of nature in the same symbol. We must admit that for this logical ambiguity, Noguchi showed the tendency to follow the changes in the situation in the 1930s with the ascendancy of expansionism and failed to distinguish himself from the trend of the times.

**(c) Concerns and Activities on Social Education and Social Work by  
Moriya Azuma**

The third chapter is the observation on the search for activities of social education and social welfare, through the case of Moriya Azuma (1884-1975).

Moriya was much stimulated by the universal ideas of the World Woman's Christian Temperance Union introduced into Japan in 1880s from America, such as, monogamous family, civil liberties, social justice and world peace while she was a student in Tokyo.

Though the primary concern of American Christian Temperance Union was in antialcoholism for men as the term temperance suggested, in Japan, the movement had to be, first of all, the political and educational movement for improvement of the social status of women. All women were socially and politically discriminated against under the law and women's political activities were prohibited under the Meiji government in those days. Especially the serious problem was government policy to authorize prostitution.

Japan Woman's Christian Temperance Union, founded in 1886 in Tokyo and led by Yajima Kajiko (1833-1925) who promoted the independent movement of women, had to struggle against the old beliefs of social values within and outside of themselves to which they had long been accustomed.

Moriya inherited the Yajima's educational experience and sense of responsibility for neighbors based on the Christian belief in God. Inspired into the awakening of the individual self and the ideals of social reform, she extended her activities to education for poor children, temperance education for men, the anti-prostitution movement, and the relief and vocational activities for unhappy women as well as other political activities including the woman suffrage movement. Such activities were based not only on her social consciousness of traditional beliefs in the principle of mutual help in community or sympathy and feeling of love in family, but on her clear awareness of a new concept of the new woman as a new social actor who would challenge the old social values concerning the socially weak or those discriminated against including women.

By the beginning of the Showa period, her main concern was shifted to the education of physically handicapped children. She founded the institution for it in 1939. We can find in the principle of her education the regard for 'independence and cooperation' among those children, the spirit of liberal education in the Taishō period.

As she called herself as a daughter of samurai in her autobiography, her father was an army surgeon who respected independence and responsibility. She might be one of the cases who were awakened to new values based upon some universalistic elements of the traditional culture.

### **III Liberal Education and Notions of Self-Transcendence** **— In the Cases of School Teachers of Nagano Prefecture —**

In the fourth chapter I tried to investigate and discover the potentiality

of modern Japanese educational thought in the case of school teachers of Nagano Prefecture in the Taishō era.

The characteristics of education in Nagano, what is usually called “Shinano Kyoiku”, might be generally pointed out as follows:

First, Nagano had the long tradition of education attaching importance to one’s personality or character. Educators and teachers had been respected highly as men of character and the leaders of the common people in ethics since the time of “Gō kō” and “Terakoya” in the Edo period. Secondly, it comparatively abounds with cultural soil in favor of the spirit of independence and enterprise because of the economical and geographical conditions as well as the historical condition. Thirdly, on the other side, people have been very eager and sensitive to the trend of the time, both inside and outside of the prefecture, among all, to that of Tokyo.

These characteristics of “Shinano Kyoiku” seem to give us the opportunity to observe and examine the interchange of the streams of educational thought regarding the continuity and innovation of tradition.

In addition, Nagano is very interesting from the viewpoint of the history of Japanese Protestantism because Christianity has had a strong influence on educators far and wide. Both Uchimura Kanzō and Uemura Masahisa had close relations with educators and school teachers in Nagano and often visited there to have meetings for a Bible class.

I selected three persons in this article, Tezuka Nuizō (1875-1954), Akabane Ōrō (1856-1981) and Obara Fukuji (1883-1965), who had strong influence and leadership over teachers in Nagano in Taishō period.

#### (a) Tezuka Nuizō

When he was a student of Nagano Normal School, Tezuka received deep influence by Uchimura Kanzō through *Study of the Bible*, a magazine written and edited by Uchimura and had a first experience of awakening of his inner life. Since that time he continued reading and studying the

message in the Bible under the guidance and influence of Takagi Shinkichi, Iguchi Kigenji, Uemura Masahisa and a foreign minister. In those days he was also influenced with the romanticism and idealism inside and outside of the country expressed in the liberal and patriotic magazine, like *Myô-jô* (bright star), *Bungaku Kai* (literary world), *Kokumin no Tomo* (friend of the people), and *Nihon Jin* (The Japanese people), which were introduced into Nagano from Tokyo as a flood.

Accepting those ideas and ideals and confronting some ideological conflicts, he approached to the 'Non-church sect' of Japanese Protestants by combining his loyalty to Jesus with that to Japan, which had been expressed as the two 'Js' relation by Uchimura. Basically Tezuka inherited Uchimura's beliefs and intention of educational course for Japanese people and challenged the traditional pattern of authoritative human relations among families, circles of teachers, and in the relation between teachers and government officials as well as pupils and teachers. Later, there appeared many eminent leaders of education in Nagano from the study and discussion meeting named "Tozai-Nanboku Kai" to whose foundation and organization Tezuka contributed very much.

Also, from the Bible class he organized at Matsumoto Kindergarten, there appeared Obara Fukuji and Akabane Ôrô who were active and influential in liberal education too, and also Kawai Seiichirô who was well-known as the central figure of the 'Kawai Incident' (1924) related to moral education in primary schools in Nagano.

Tezuka showed his religious thought as an individual self before God using the traditional terms or symbols such as "Michi" (the way or Logos), "Kei Ten-Ai Jin" (Respect Heaven and love human beings), and "Soku-Ten Kyo-Shi" (Follow the reason of Heaven and deny self-centeredness). Through those terms he tried to express his transcendent reference point, though still sensitive, and his inner principle of self-denial.

Tezuka was very influential in the reform of education in primary

schools in Nagano, working as a teacher in public schools for twenty-eight years while as a layman preacher of Matsumoto Japan Christian Church for over thirty years. He was one of those who consistently opposed the militaristic and bureaucratic authoritarian attitude toward education in Nagano with courage upon his transcendent reference point.

**(b) Akabane Ôrô**

Akabane, on the other hand, based on the belief in the symbol of 'Nature' as eternal truth, developed his educational thought. He was much inspired by fine art and literature when he was a student of Tokyo Art School, and responded to the subject of the time, that is, the search for the individual self or true self most acutely. Finally he came to commit himself to humanitarianism and duty to nature of man as a kind, influenced by Mushakoji Saneatsu, Yanagi Muneyosi, and others whose literary and artistic movement was called that of "Shirakaba-ha" (the white birch circle). Later he was encouraged by William Blake's idea of 'Vision and Imagination' of eternity through Yanagi. Following the vision of eternity in the artistic and spiritual values, he came to express his educational philosophy in the magazine named *Chi-jô* (on the earth), which had considerable influence among teachers and children in Nagano.

In spite of their great expectations to introduce artistic and spiritual value into education of primary schools, their movement soon came into conflict with parents' expectations for their children. Because most of them were farmers, and did not desire a radically liberal tendency in education. Akabane and his group were isolated gradually and after several years of prosperity, their activities came to an end substantially under the suppression of the local authority and the distrust of the village people.

**(c) Obara Fukuji**

In those days, at the elementary school attached to the Nagano Normal

School, Sugizaki Yô and Yodogawa Mojû, returning from study abroad, began to introduce scientific methods of J. Dewey of M. Montessori and opened two experimental classes in this school. Obara Fukuji belonged to this school just the time when the tendency to liberal and new education was getting very active. Among the teachers of this school there were some members of “Shirakaba-ha” and Obara was close to them and understood their educational ideals. Both Obara and Akabane attended the Matsumoto Bible Class managed by Tezuka. Obara could be said to stand at the point of the interchange of the streams of educational thought around new education, liberal education and Christian education in Nagano Prefecture.

Obara started his study on education from English ethics presented by J.H. Muirhead and T.H. Green. While he was working under the influence of new education in the elementary school of Nagano Normal School, he was baptized by Uemura Masahisa.

Among Christian educators in Nagano, Obara seemed to have grasped most definitely the concept of personality and the individual self in the ‘I-Thou’ relationship before God. He understood the meaning of respecting the individual self, namely, transcendent inter-subjectivity of man and the democratic social relations under transcendental reference. He loved the term “Kei Ten-Ai Jin” in which he found the most suitable expression for the essence and possibility of personality or the individual self he had understood in the Bible.

His definite attitude against the suppression of the Nagano bureaucracy over liberal education around the “Kawai Incident” was clearly expressed in his article he contributed to the magazine *Shinano Kyôiku*. Just in the year when the Pacific War broke out, he resigned the position of principal, protesting the conclusion of the Japanese-Germany treaty and the increasing control of authority over liberal education. After that he became a preacher and gave religious and educational talks at the Nagano Japan Christian Church.

## **IV Conclusion**

In conclusion, all the educators in this study endeavoured to seek for the elements of new individual and social values in the bosom of Japanese culture and participated in the innovation of the old value system.

As already mentioned, it is not an easy task for us Japanese people to grasp definite notions of the individual self and universal values beyond community and nation where the traditional pattern still dominates in the form of group commitment and idol worship. The educators treated in this study have left many questions for us to solve.

However, they have contributed to present some directions and embryos of possibilities to this most important educational subject.